

<原著>

中国語学習における日本語話者の「母語干渉」について
—音声面の対照から—

宋 榮芬

On the Problem of ‘Mother Tongue Intervention’
in the Process of Learning Chinese of Japanese Native Speaker

Song Rongfen

At the beginning of learning foreign language, nobody can get rid of the influences of mother tongue, which can either be positive or negative. The former is called ‘positive transfer’ and the latter is called ‘negative intervention’. It is an important problem for both language learners and teachers to take advantage of positive transfer and control negative intervention to the maximum extent.

By comparing Chinese and Japanese, this essay aims to find out the mechanism of positive transfer and especially the negative intervention between two languages through pointing out the characteristics of these two language systems.

The basic unit of Chinese pronunciation is syllabic, while the pronunciation of Japanese is based on ‘beat’ (拍). In Chinese a syllabic can make a single word, while in Japanese the number of ‘beat’ doesn’t equal to that of syllabic. Phoneme that can’t be a single syllabic takes a beat in pronunciation of Japanese. Chinese has far more syllabics than Japanese. Thus for Japanese native speaker understanding, a great amount of syllabics that their mother tongue doesn’t have and handling four tones in Chinese are the most difficult part in their learning of Chinese.

Key words : mother tongue, positive transfer, negative intervention, syllabic,
beat (母語、正の移転、負の介入、音節、拍)

はじめに

外国語を習得する際、最初から誰でも避けて通れないのは、母語からの影響であろう。母語の影響には、プラス面もあれば、マイナス面もある。いわゆる「正の移転」と「負の干渉」である。いかに「正の移転」を最大限に発揮させ、「負の干渉」を最小限に食い止

めるかは、学習者のみならず指導者にとっても重要な課題だと考えられる。ところが、各自の言語の内在的特徴を十分理解しておかなければ、母語と目標語間の移転のメカニズムを解明し、それに対処することができない。孫子の兵法に曰く：「知己知彼、百戦不殆。」(敵を知り己を知れば百戦危うからず)

日本語話者の中国語教育の中で、その効果

を高めるために、中日言語の対照分析から、双方の特徴を明らかにし、言語間の移転、特に母語干渉のメカニズムを突き止めたい。母語干渉は音声、文字、語彙から、文法、待遇表現、言語行動などの各方面にわたるが、まず、音声の面から論を展開していきたい。

1. 中日言語の基本的な音声特徴の比較

中国語と日本語の音声特徴を考えると、両国の母音と子音の数が異なることや、基本音節の構成やアクセントの違い等が挙げられる。母語干渉を考察するにあたり、語音の基本単位となる「音節」に焦点を絞り、構造の特徴と相違を明らかにしたい。

(1) 音節で表す中国語

音節とは、大辞泉によると「言語における音の単位。ひとまとまりの音として意識され、単語の構成要素となる。開音節と閉音節との別がある。」と説明されている。つまり、一つの母音を主とする音のまとまりのことだと理解すればよいであろう。

中国語は原則として一音 (phone) が一音節で構成され、書面になると一文字とし、語の意味を持つ。つまり中国語はいわゆる「表意文字」で、音韻と意味の両方を表す。それで、中国語の一音節そのものは、語の要素になる場合とそれ自体が意味を持つ場合がある。中国語、とくに古代漢語に単音節が多いのはこの故である。現代中国語には二音節の語が多くなっているが、単音節の語もまだ相当存在している。(勿論、外来語の表現として、三音節以上の多音節の語もまれにある。)

中国語の単音節の構造的特徴は大きく三つにまとめることができる。一つ目は、母音を持つのはもとより、母音だけで音節になり得ることである。例えば、「啊 /a/」[A] (アッ) 注①、「哦 /o/」[o] (えー)、「藕 /

ou/」[ou] (レンコン)、「有 /you/」[iou] (ある / いる) 「外 /wai/」[uai] (そと) など母音のみで構成される音節である。この中の“y”と“w”については、語の連続の中で他語との境目として“i”“u”の代わりに表記したものである。

二つ目は、母音に頭子音と末子音を加えることがあるが (/zhuang/ 装) 英語のような複数子音の連続がない。(/strength/ 力) それに二重母音も、三重母音、鼻母音がある。例えば、「买 /mai/」[m ai] (買う) 「票 /piao/」[p'iau] (切符) 「先 /xian/」[ɕiæn] (先) 「快 /kuai/」[k'uai] (速い) などで、これらは、すべて単音節である。“a”は主母音として、“i”“o”“u”はその前になると介音、後ろになると尾音としか見られていない。一連の単音を頭から尾まで切り目はなく、なめらかにまとめて発音されるのである。それで、中国語には一音節は最小が一単音であり、最大が四つの単音で構成される。

即ち「頭子音+介音+主母音+尾音/末子音」の形となっている。

	↓	↓	↓	↓	↓
快	→	[k + u + a + i]			
先	→	[x + i + a + n]			

逆に“a”と“i”及び“o”“u”をすべて別々の母音として認識し、はっきり弁別できるように発音した場合もある。それぞれは「蚂蚁 /ma/yi/」[m A] [j i] (蟻)、「西安 /xi/ an/」[ɕ i] [an] (西安) 「皮袄 /pi/ ao/」[p' i] [au] (皮のジャンパー) 「酷爱 /ku/ ai/」[k u] [ai] (大好き) のように、別の意味を持つ二音節単語になる。

三つ目は、各音節が声調を持つことである。これは中国語の音節の最も大きな特徴とも言えよう。声調とは、音節間のアクセントの変化ではなく、一つの音節自体の高

低の調子である。即ち「陰平、陽平、上声、去声」の四つがある。陰平とは高平調で、発音の際に音階の5度から5度まで発声することである。第1声ともいう。陽平とは上がり調で中音の3度から高音5度までへ上がるように発声することである。第2声ともいう。上声とは先ず半低音2度から低音1度まで下がり、更に半高音4度までへ上がるように発声することである。第3声ともいう。去声とは高音5度から低音1度までへ下がる全降調で発声することである。第4声ともいう。

ちなみに中国語の基本音節は400個ほどあるが、理論的にはその一つひとつに四つの声調が付く（すべて揃っているわけではない）ので、中国語の基本音節は1200個ほどにも上る。実際は、1265個あると言われている。注②

(2) 「拍」でリズムをとる日本語

音節で表す中国語と異なり、日本語の語音においては、「拍」というリズムの表現はとても重要なことである。日本語の音節は数少ない。五十音図で表すように、日本語は基本的に子音+母音の組み合わせで構成されている。濁音、半濁音、拗音などを含め、日本語のなかに現れる子音と母音を掛け算すれば、音節数は概ね算出できる。その他の外来語にだけ現れる特殊な音節を加えれば、110種類ぐらいになると言われている。(金田一春彦『日本語』岩波新書による)。そして、日本語の仮名は表音文字として、ひとつひとつの文字がただ言語の音韻を表し、言語の意味を表してはいない。その故、日本語には単音節の語が非常に少なく、二音節以上のものが多い。また、日本語のリズムは音節の単位で音韻リズムを表すのではなく、独特の「拍」で表すのである。

「拍」とは、モーラ (Mora) のことで、「韻律学または音韻論上の単位。1短音節に相当するとされる音の長さ」のことである。(大辞泉)

日本語においては拍が重要であるのは、仮名で表現すると、一つひとつの母音又は子音+母音の単位をほぼ同じ長さ・同じ強さで繋いで発声するからである。話のスピードに関係なく、1文字1文字(カナ)にはほぼ等時間を与えるような音韻が感じられる。つまり、この音韻的时间を拍(モーラ)というのである。日本語の発音においては拍より再細分化することができない。それでは、日本語の拍と音節を比べてみよう。

日本語のリズム感が最も感じ取れるのは短歌や俳句といった詩歌形式であろう。俳句は基本的には「五七五」の形で、17音(仮名)で詠まれる。例えば:「秋深き 隣は何を する人ぞ」(松尾芭蕉)の場合、直音だけなら仮名の数と拍の数は一致する。音節数=拍数。ところが、「行水(ぎょうずい)の 捨てどころなし 虫の声」(上島鬼貫)の場合で、「ぎょう」のような小さい「ヨ」を含んだ拗音が大小2つの文字で一拍になり、「う」の部分の長音だけでも1モーラ的时间が与えられる。つまり、1組の子音+母音でできている拗音の「ぎょ」と長音を表す「う」が1モーラずつで二拍になっている。又、「くろがねの 秋の風鈴 鳴りにけり」(飯田蛇笏)「梅が香にのっと日の出る 山路かな」(松尾芭蕉)の場合には、撥音「ん」でも促音「っ」でも、前の文字と一緒に発声するしかできないにもかかわらず、拍はそれぞれ一つになっていることが確認できる。ところが、撥音「ん」や促音「っ」は、子音のみであるから、単独では音節にならない。長音の「う」は前の母音の延長で、切れ目はなく

前拍と一緒に became ため、独立の音節にもならないわけである。それで、撥音、促音、長音を含んだ日本語は音節と拍が一致したものではないと考えられる。その上、日本語にとって、1音節だけでは無意味で、まとまった何音節かが拍に乗って、意味を持つようになるのである。

2. 日本語話者の中国語学習における音声学習障害

前述のように、中国語は音節を単位とする表現であることに對し、日本語は「拍」の単位で表現するのである。その違いによって、中国語を勉強する際、日本語話者にとって、自分の母語よりかなり多数の中国語音節の習得と四つの声調の把握が難しくなってくるのである。

(1) 母音、子音の違いによる日本語話者の困惑

中国語と日本語の母音の相違は、前述のように、中国語にはかなりの複合母音（13個）があることに加えて、単母音だけでも日本語より二つ多く、更に鼻母音（母音の後ろにnとngを付け、二種類で16個）を加え、合わせて36個に達することである。そして、子音は日本語にあるものとなないもの（そり舌音）を含め、全部21個である。これだけの数はすでに日本語の五十音図の数に匹敵するから、子音で母音を掛けると更なる数になることは当然である。普段慣れていないこれらの発音を、学習する際、日本人話者の困難さが想像できる。一つずつの母音、子音の学習を語ると長くなるため、具体的な発声問題を避け、母語干渉の本題から、ここではあくまでも一般的、共通的なことだけを検討したい。

これは、口の動きの慣習によるマイナス影響である。一言でいえば、日本語より中

国語の発音は、口の動きがはっきりしている。日本語の母音を発音するときは、唇や舌をあまり動かないことに對し、中国語を発音するときは、唇や舌を大きく動かさなければならぬ。母音を発音するとき、口をあけたり、横に引っ張ったり、すぼめたり、唇の形が常に母音の変化により変わる。単母音の場合、口の外見からはっきりと区別ができる。例えば「u」という母音は日本語では非円唇音で、中国語では円唇音である。子音と組むと、例え同じ /zu//su/ で表記されても、日本語は「図」[dzu]、酢[su]と、中国語は「租」[tsu]、「素」[su]と発音し、全く違う音声になる。唇をすぼめて丸めに突き出さないと中国語の音声にはならない。ところが、複合母音の場合には、主母音の前に介音があるか、後ろに尾音が付くか、或は両方揃っていることがある。頭子音を加えると音節はさらに長くなる。そのため、このような音節を発音するときは、頭子音から尾音まで口の動きはなめらかで連続的である。一連の単音を一つのまとまりの音として出さなければならない。その際、口のあけ方や閉め方の具合が少しでも違つと、似ている音なのに、別の語になってしまう。従つて、中国語の発音を勉強するとき、元々日本語に全く存在しない母音、子音を問題にするよりも、まず一見日本語に似ており、簡単に発音できそうな母音や子音においても、日本語話者によく見られる間違いがあることを明確にしなければならない。つまり、日本語の発音の特徴と慣習が妨げになり、類似する中国語の発音をするとき、ただ口の動き方が物足りないことだけで起こる誤りである。例えば、複合母音を発音する際、日本語話者はよく口の開け具合が十分ではなく小さいところに止まり、安易に「ai」(アイ)を「ei」

(エイ)に「ao」(アオ)を「ou」(オウ)に発音する傾向が見られる。一例を挙げると、买 /mai/ (買う)と美 /mei/ (きれい)を、老 /lao/ (老い)と搂 /lou/ (抱える)をよく混同する。また、日本語話者が頭を悩ませる鼻母音の「n」[n]と「ng」[ŋ]の区別も口の開閉の大きさに関わっている。実は日本語も同じ撥音「ん」でも、後ろに来る音によって、調音点が調節され、発音されている。即ち「安全」の「アン」[n] (歯茎で調音)「安心」「アン」[n] (歯茎硬口蓋で調音)と「案内」の「アン」[ŋ] (軟口蓋で調音)の違いである。ただし、通常、このような違いは日本語の中で同じ音素の異音と見なされ、別の意味の音素に認められないので、日本語話者に意識されていないのである。しかし、中国語の中で、/n/[n]と /ng/[ŋ]は、ミニマルペアで、「a」「e」「i」等母音の後ろに付いて、整然と別々の音素として、区別されているのである。調音点の違いによって、/ng/[ŋ]を発するときには、口の奥のほうで舌の根元を盛り上げ、n/[n]を発するときより、口を大きく開けなければならぬ。

このような普段の慣習によるミスは、注意すれば、すぐ直すことであるが、意識的に目標言語の発音特徴と方法を身につけない限り簡単に無くすことはできないであろう。

(2) 中日両言語のアルファベット音声表記方による混乱

現代中国では中国語の音声を表記するのにピンインという表記が使われている。ピンインというのは、ラテン文字アルファベットを借用し、中国で作られたルール(ピンイン規則)に従って、漢字、漢語の発音を表記する方法である。数少ない26のアルファベット文字で、400余りの音節に対応

するには、工夫が必要である。その上、どんなに工夫しても、中国語の音声システム自体が英語等の音声システムに異なることから、それぞれの子音母音に当てられた音標文字は、英語等音標文字の役割にすべて一致するわけではない。つまり、アルファベットで表される中国語の音声と本来のアルファベットの音声の間にずれが生じることは避けられない。例えば、本来清音、濁音を区別するミニマルペア「pb,td,gk」等は、濁音が殆どない中国語にはその役目がなく、その代わりに有気音と無気音の区別に使われている。子音の連続「zh,ch,sh」中の「h」は、英語では発声しないのに対し、中国語ではそり舌音を表している。そのほか、26字母が足りないのを補うためには、「条件により変読」、「符号の付加」などの方法を用いた。これらの中国式の工夫は「漢語ピンインの規則」である。

一方、日本語にも漢字と仮名の表記法以外、日本式のアルファベット表記法がある。つまりローマ字表記である。現在標準式とされる日本語のローマ字表記は、米国宣教師が作ったヘボン式から発展してきたため、英語の準拠に近いが、日本語の音声システムに合わせるために若干の変更が加えられた。こうして見れば、同一のアルファベット文字は少なくとも中、日、英三種類以上の言語音声を表しているのが現状である。そうすると、お互いの間に干渉が生じるのは避けられないことであろう。特に、中国語よりも先に英語のアルファベットに慣れた日本語話者にとって不利である。中国語を勉強する際、日本人の知識にあるアルファベットの読み方で中国語のピンインを読んでしまうケースはよく見られる。例えば、“替” /ti/[t' i] (替える)を「チ」[tɕ' i]と発音し、“气” /qi/[tɕ' i] (気)の意味に、“哥”

/ge/[k ɤ] (兄) を「ゲ」[gei] と発音し、“給” /gei/[k ei] (あげる) の意味になる。他に“少” /shao/[tɕ au] (少ない) を「ショウ」 /xiao/[ɕ iau] (小さい) に、“四” /si/[si] (四) を「シ」/xi/[ɕ i] (細かい) に、“参” /can/[ts' an] (参) を「カン」/kan/[k' an] (看) に、“从” /cong/[ts' un] (従う) を「クン」/kong/[k' un] (空) に読み間違える例も挙げられる。つまり、中国語のピンインは普段日本人が見慣れたアルファベットを用いているため、日本語話者はつい日本語のローマ字読み方や、英語の読み方で読んでしまうのである。従って、中国語学習の際、日本語話者はアルファベットを単なる音声表記として理解することにとどまらず、その綴り方の法則いわば「漢語ピンインの規則」をしっかり覚え、正しい発音の習得に努めるべきである。

(3) 日本語アクセントのパターンに影響される四声の発声

周知のように、日本語の共通語の発音は東京方言を基にし、「拍」を単位とした2段(高低)の高さアクセントが標準的なアクセントとされている。つまり、第一章にすでに述べたように、日本語の拍は必ずしも音節に等しいわけではない。そして、アクセントは語の音節の基準ではなく仮名の数で拍の高低を並べるのである。それに、頭高型、中高型1、中高型2、尾高型、平板型に分かれている。共通語のアクセント特徴としては、1拍目と2拍目の高さが異なることと、一度下がった拍は再度上がらないという二つが挙げられる。日本語のアクセントと中国語の声調との最大の区別は、日本語のアクセントの高さの変化は拍と拍の間に起こり、中国語の声調のような音節自体の変化ではない。そうになると、日本人話者が中国語を発音するとき、単音節

の変化がある声調を覚える必要があるのみならず、多音節(主に二重音節)の連続声調のパターンをも勉強しなければならない。さらに前述した四つの声調に軽声(多音節の語尾にくる音節は声調を付けず前の音節に軽くそえる発声)を加えると、その4倍は20パターンになる。それは極めて難しいだろう。その中三声自体、また二声の後に三声、三声の後に二声が続く場合、声調の把握を特にしにくいという学習者の声が多い。例えば、数字を数えるときには、一 /yī/ 注③、二 /èr 4/, 三 /sān 1/, 四 /sì 4/, 六 /liù 4/, 七 /qī 1/, 八 /bā 1/, より五 /wǔ 3/ と九 /jiǔ 3/, 十 /shí 2/ の方が、発音し難い。「謝謝 /xiè 4 xiè 4/」(ありがとう)「再见 /zài 4 jiàn 4/」(さようなら)より、「你好 /nǐ 3 hǎo 3/」(こんにちは)「请坐 /qǐng 3 zuò 4/」(お座りください)「请喝茶 /qǐng 3 hē 1 chá 2/」(お茶をどうぞ)の方が正確に身につけることが難しい。その原因は、主として三声自体の“半低音2度から低音1度まで下がり更に半高音4度まで上がる”といった屈折した発声法が“一度下がったらもう上がらない”という日本語のアクセントの慣習に相反するし、他の三つの声調の拍感覚にもずれがある。一声、二声、四声は一拍とすると、三声だけ一拍半の感じがすることにあると考えられる。その上、日本語は一つ一つの語にはアクセントがあるが、複数の語が連続した時、流れを成す傾向がある。それは岩永信之氏が指摘したように日本語では「四拍子が好き、四拍に満たない場合、空白や長音をいれて四拍にする。例: 1, 2, 3, 4, 5, 6 に いち、に、さん、し、ご、ろくではなく、いちに一、さんしー、ごーろく」のように読む習慣である。注④。それに対して、中国語には、そのような流れがない。つまり、中

国語の場合音節（個々の漢字）が連続に並んでもそれぞれの音節が持つ本来の声調は変わらず、一つのパターンに傾くことはない。それによって、中国語の音声は上がったり、下がったり変化に富んだ音声になっている。日本語のアクセントパターンに慣れた日本語話者は、中国語の単語等を個別に読むとき正しい声調で読めても、単語を並べた文を読むことになると、本来の声調を守ることができず、日本語を話すときと同じように、あるパターンの流れになりがちである。前出の例にある数字を連続に読むと、本来三声の5と一声の8は声調がそれぞれ一声と四声に発音され、6と7をペアにして、前の二つのペアと語呂合わせのように全部1-4、1-4、の声調パターンになってしまうケースがよくみられる。

正確な声調：一 /yil/、二 /er 4/、三 /san 1/、四 /si 4/、五 /wu 3/、六 /liu 4/、七 /qi 1/、八 /ba 1/、（太線の数字は間違いやすい声調である）

間違えられたパターン：一 /yil/、二 /er 4/、三 /san 1/、四 /si 4/、五 /wu 1/、六 /liu 4/、七 /qi 1/、八 /ba 4/、（二重線の数字は間違えられた声調である）の通りである。

おわりに

以上主に母語干渉の面から、日本語話者の中国語音声学習における問題をまとめた。要するに、無意識的な習慣を問題視し、それを意識して、積極的に注意すれば、目標言語への一歩前進につながることになるのであろう。

注①：“ / / ” で括弧されたのは「音素」で、“ [] ” で括弧されたのは国際音声記号 IPA である。

注②：『対外漢語語音及語音教学研究』P20 から引用（商務印書館出版 2006年 北京）

注③：/ / 中綴り後の数字は声調の表しである。

注④：<http://ufcpp.net/study/misc/lecture/vorec.ppt> から引用

参考文献：

- 1、『対外漢語語音及語音教学研究』（商務印書館出版 2006年 北京）
- 2、NAFL 日本語教師養成プログラム7 『日本語の音声』
- 3、NAFL 日本語教師養成プログラム17 『日英の対照研究』
- 4、「音声・言語の基礎と音声認識」岩永信之 スライド1
<http://ufcpp.net/study/misc/lecture/vorec.ppt>